慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	森芳雄の風景素描について
Sub Title	Notes on newly donated works : Yoshio Mori's landscape drawings
Author	桐島, 美帆(Kirishima, Miho)
Publisher	慶應義塾大学アート・ センター
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学アートセンター年報/研究紀要 (Annual report/Bulletin : Keio University Art Center). Vol.29 (2021/22), ,p.166- 180
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究紀要2021 新規寄贈作品紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11236660-00000029-0166

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

［新規寄贈作品紹介］森芳雄の風景素描について

桐島　美帆
所員、学芸員

はじめに

このたび、森芳雄（1908-1997）のご長女・門田正子氏より森芳雄の素描 60 点の寄贈申し出があり、同作品を 2021 年度にアート・センターで受贈した。森芳雄は、当時三田の綱町に校舎のあった慶應義塾普通部で 1921 年から 1926 年まで学んだ[*1]。この慶應義塾との縁で、本学は森芳雄の作品を 5 点所蔵している[*2]。本稿では素描作品のリストおよび新規撮影画像を掲載し、本素描群の内容について記す。

1. 作品基本情報

＊以下で用いる No. は、「森芳雄素描リスト」内及び「森芳雄素描画像一覧」の番号と対応している。

素描 60 点は、すべて紙に描かれており、スケッチブックから切り取ったもの、画用紙、藁半紙の 3 種類の紙が用いられている。紙の両面に描かれている作品もあり、描画面は全部で 64 面ある。収蔵した時点で、Nos.1-24 は複数枚合わせてマット装された状態であった[*3]（fig.1-6）。また、マットに貼られているテープの劣化や、一部の作品にフォクシング、紙の黄変等が確認される[*4]。No.24 にのみ、「y.mori」の署名と「1952」の年記がみられる。『森芳雄 素描集』では、Nos.1-24 の制作年代は 1950 年代とされている[*5]。

2. 描かれた場所の同定

門田正子氏によると、本素描群は森芳雄が三田キャンパスを訪れて写生した際の素描である。ただ、一見してどの場所や対象を描いたのか判然としない素描もある。そこで今回、画家の写生時の足跡を辿るため、1950 年代の三田キャンパスの建物の特徴や景観を手掛かりに、どの場所を描いたものか調査した[*6]。本項ではその調査結果を対象ごと記す。本項では一部のみ記し、全作品の情報についてはリストに反映した。

描画内容の内訳は以下のとおりである。ただし、複数の建物が描かれている作品もあるため、詳細はリストの内容注記を参照のこと。

裏門（現西門）周辺 6 点
演説館　11 点（描画面は 13 面）
図書館（現図書館旧館）・図書館周辺　22 点
その他の建物 10 点
広場、空き地、その他　12 点（描画面は 13 面）

fig.1

fig.2

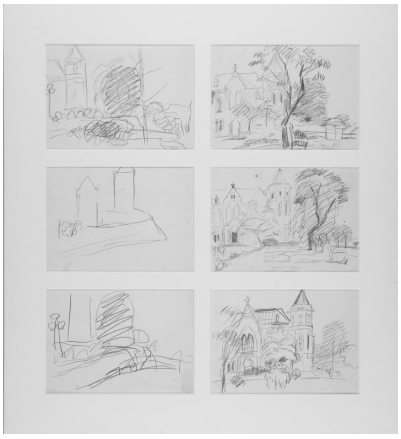


fig.3

fig.4

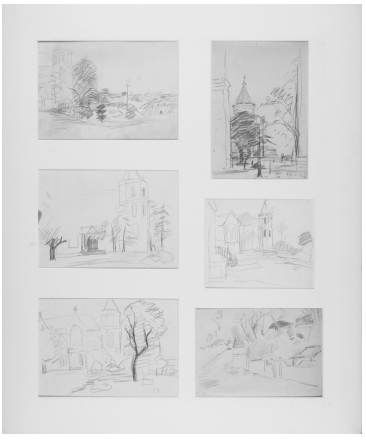


fig.5

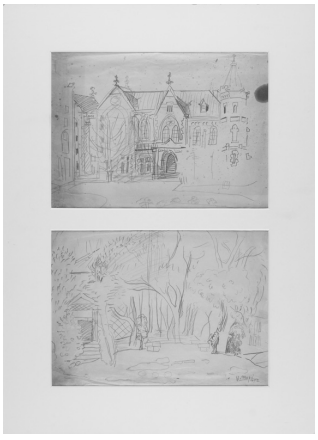


fig.6

fig1-6 受入時の No.1-24 のマット装の状態

2-1　裏門（現西門）周辺

No.3 では門とその脇の土手や塀、木々が素早い筆致で表され、塀の奥の群木が暗い量塊をつくる。門柱には球体のオブジェが付いている。当時の写真を見ると、この門柱は裏門のものであり、裏門を写生したことがわかる*7（fig.7）。ここで注目したいのは、No.3 に体育会本部の姿が描かれていないことである。体育会本部は、谷口吉郎（1904-1979）の設計で 1952 年 5 月に着工、同年 9 月に竣工した木造 2 階建の建物である。戦前この場所には大学文学部の考古室があり、戦災で焼失し空き地となっていた*8。森が本素描において眼前の風景に則して写したと仮定するならば、この素描は戦火で焼失してから 1952 年 4 月までの間に描かれたことを示している。

No.25 では、縦長のフォーマットに、坂道に向かってやや左に視点を置き、画面左半分を土手が、右半分を坂道が占める。遠景には第三校舎（四号館）が見えることから（fig.8）、裏門から三田山上へ向かう坂道周辺を描いていることがわかる。第三校舎は谷口吉郎の設計で 1949 年 5 月に竣工した木造 2 階建の建物であり、本素描では第三校舎の特徴である連続した縦長窓が描かれている。No.27 は、坂道に向かってやや右側に視点を設定し、第三校舎や木々を簡略に描く。No.26 では、紙面を横長に用い、裏門周辺の構図を大まかに捉え、土手と坂道、綱坂と土手の間の塀、第三校舎を細い線で簡潔に示している。

裏門周辺を描いた森芳雄の油彩作品《坂道》*9（1953 年、慶應義塾大学アート・センター所蔵、fig.9）と比較してみよう。

fig.7　慶應義塾裏門への下り坂と中等部生
1950 年代　画像提供：慶應義塾福澤研究センター

fig.8　三田山上（裏門坂道）の中等部生 1950 年代　画像提供：慶應義塾福澤研究センター

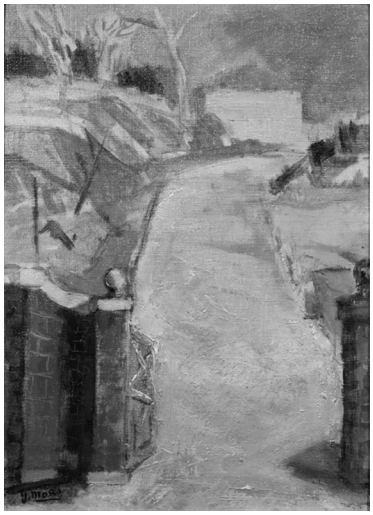


fig.9　森芳雄《坂道》

素描 No.25-27 のいずれも坂道をやや斜めから捉えているが、油彩作品では坂道をほぼ正面から捉え、坂道全体を画面に収めることで、坂道の存在を一層印象づけている。建物の窓の描写も排され、建物の壁と坂道の表面が作品の画面を支配する。絵具は全体に薄塗であるのに対し、坂道と建物部分には絵具が厚く塗られており、そのマチエールの違いによっても、同部分が際立っている。油彩作品では、写生時よりも構図が単純化され、静謐で構築的な画面が作り出されているといえる。

2-2　演説館

本素描群の中で、演説館[*10]やその周辺を描いたと思われるのは16面である。No.5には、木々の茂みの中に立つ演説館の姿が描かれる。素描には切妻造屋根の玄関が確認でき、描かれている建物が演説館であることがわかる。No.6の画面左手には交差した斜線がみられるが、これは演説館のなまこ壁であろう。演説館脇の木々の間からは、第二研究室（谷口吉郎設計）[*11]と大講堂[*12]が覗く。ここでは第二研究室の連続する縦長窓や大講堂のアーチ窓がみえる。第二研究室は1951年1月着工、8月竣工で、大講堂は戦争の空襲により外壁だけが残り、1957年に取り壊されるため、本素描は1951年夏以降から1957年の間に制作されたものと推定できる。Nos.4-6が合わせてマット装されているfig.2を見てみよう。No.4は遠景にみえる塾監局[*13]の角度から、演説館周辺で描かれたと思われるが、fig.2では演説館周辺から塾監局を眺める構図（No.4）、木々の中に立つ演説館を遠くから眺める構図（No.5）、演説館の端を視野におさめながら他の建物を覗く構図（No.6）と、3つの異なる視点を組み合わせており興味深い。

No.24は、本素描群の中で唯一サインと年記がみられる。また、No.23と共に本素描群の中で最も大きいサイズの紙が用いられている。画面の大部分を木々が占め、樹木の枝はのびやかに一気に描かれる。左方には演説館が、右方奥には第二研究室の窓が覗く。Nos.29-37では、建物の各側面と、玄関部分のクローズアップから演説館全体を画面におさめる構図まで、さまざまに構図を変えて描いている。

2-3　図書館（現図書館旧館）、図書館周辺

素描60点の中で、図書館[*14]（現図書館旧館）を描いた作品は22点と、最も多い。図書館は1945年5月の空襲で屋根が抜け、本館内部が焼失。その後1949年に修築工事が完了した[*15]。No.7では図書館の八角塔が簡略に描かれ、葉叢の暗部にハッチングが施されている。右手の坂の下には家々が覗く。No.8とNo.9には、対象ははっきりと描かれていないが、No.9、No.12、No.13、No.17に描かれた街灯の形状が同じことから、No.9は図書館の八角塔部分と、門へ続く坂を描いたものであることが推察される。No.8は、八角塔と図書館の出入り口部分であろうか。Nos.10-21では少しずつ視点と角度を変えて描き、さまざまな構図を試している様子が伺える。図書館を最も入念に描いているのはNo.23である。花崗岩の石積みによる装飾や尖頭アーチ型の窓が描かれ、塾監局を画面左に捉える。森芳雄は《三田山上風景》（1951年、慶應義塾大学所蔵、fig.10）を油彩で描いており、No.23は本作ともっとも近い視点を有する。油彩画では、木を中央に据え、枝の隙間から図書館を覗く構図に変更している。

fig.10　森芳雄《三田山上風景》

2-4　第一校舎、第二校舎、第一研究室、第二研究室、学生ホール

森は、演説館や図書館のような特定の建物だけを主役にした素描だけでなく、複数の建物を1枚の画面におさめる構図も選択している。たとえばNo.50では大イチョウの向こうに第一校舎[*16]と学生ホール[*17]を望む。No.52では左手に第一研究室[*18]と図書館、右手に第一校舎。No.55では中央に大イチョウを据え、奥に大講堂、右手に第一校舎が見える。No.56は、画面中央の建物の屋上煙突部分の形状が第二研究

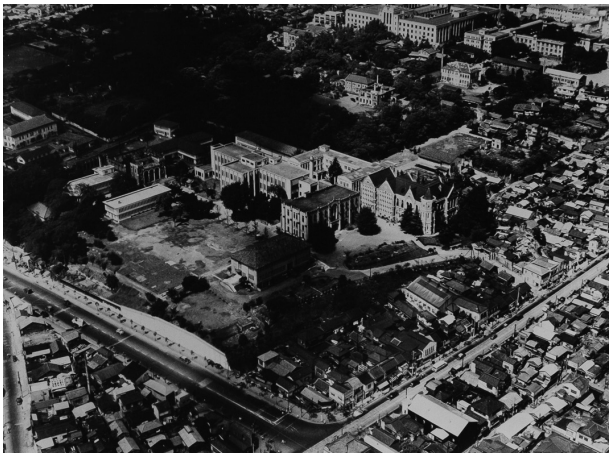


fig.11　三田航空写真1955年頃　画像提供：慶應義塾広報室

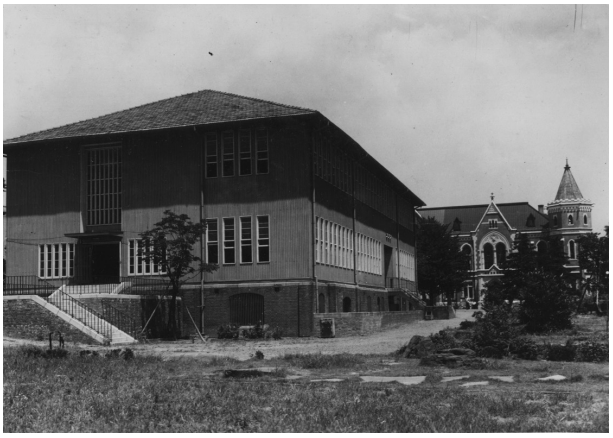


fig.12　五号館と図書館 1950 年代　画像提供：慶應義塾福澤研究センター

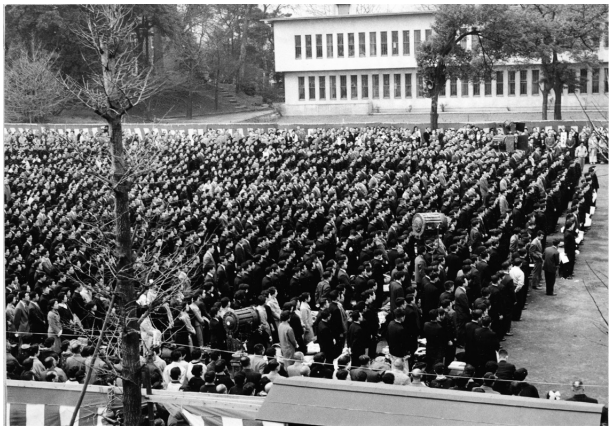


fig.13　昭和 32 年度卒業式。後ろに第三研究室がみえる。1958 年 3 月 21 日。
画像提供：慶應義塾広報室

室と一致することから、中央が第二研究室と思われる(fig.11)。そうすると奥の右手が大講堂、左手の木立に隠れているのが演説館。そして fig.12 の写真にみられる階段部分の特徴との類似から、画面手前にみえる階段は第二校舎（五号館）*19 の階段ではないかと推察される。さらに、谷口吉郎設計の第三研究室*20 が竣工した後では、第二校舎脇から西の方角を眺める場合、第二研究室ではなく第三研究室が見えるはずであるので、この推測が正しければ、本素描は第三研究室竣工前 1952 年 9 月までの時期に描かれたと考えられる(fig.13)。

2-5　広場、空き地

森芳雄は建物だけではなく広場や空き地も描いている。Nos.44-47 に描きとめられているのは、1947 年に図書館と五号館前の広場に整備された小公園（福澤公園）と思われる*21。No.57 には No.25 および fig.8 に確認できる第三校舎側面の小さい屋根部分との類似があることから、第三校舎付近とみられるが、本素描における画家の眼差しの焦点はこの建物ではなく、その周辺の木々などの自然に向けられているのは明らかである。また、No.37-2 と No.58 には木のみが、No.60 には、野草や低木の生える空き地が描かれる。

以上、森芳雄が描いた三田キャンパスの場所を確認した。森は図書館と演説館、そして裏門坂道周辺を繰り返し描くとともに、キャンパス内のほぼすべての建物をさまざまな角度から描き、細やかに写し取っている。

制作時期については、本素描群が当時の風景をそのまま写し取っていることを前提として、建物の竣工時期に照らし合わせていくらか時期を絞ることができた。第二研究室を描いた素描については 1951 年夏以降に、裏門周辺を描いた素描は、体育会本部が描かれていないことから 1952 年 4 月までの間に描かれたと考えられ、No.56 には第三研究室の姿が描かれていないことから 1952 年 9 月までの間にスケッチが行われたと推定できる。

3.　キャンパスという写生地、森芳雄の捉えたキャンパス

森が訪れた 1950 年代初頭の三田キャンパスは、戦後の復興計画が進み、谷口吉郎による白く清新な校舎が次々と建ち並び始めた時であった。同時期の森について振り返ると、森は戦時中、1945 年の空襲で家が全焼し、作品のほとんどが焼失。戦後は制作意欲がわかず、山口薫に「絵を描け。描けばそれが 10 年、20 年後にいくらかのプラスになるぞ。生活のためにも」と励まされたという*22。ただ、戦後も素描だけは続けていたそうだ*23。1950 年には森の代表作のひとつ、《二人》*24 を発表し、徐々に制作のペースを取り戻していく。森が三田を再び訪れたのは、ちょうどその後である。森は慶應時代の同級生の紹介で、同窓生より依頼されて慶應のキャンパスを描くことになったのだ*25。森の眼に、自分がかつて青春時代を過ごした三田の地はどう映っていただろうか。図書館や演説館を繰り返し描いた素描からは、より良い構図を探し出そうとする画家の試行錯誤の姿がみえるが、学生ホールや第二研究室など、竣工したばかりの校舎を木々の間や他の建物の後ろに覗く構図からは、移り変わるキャンパスの景観を興味深く見つめる森の姿も想像できる。

森の眼差しは、建物にのみ向けられていたわけではない。

素描群全体を見渡すと、広場や空き地、木立を描いた素描の魅力に惹きつけられる。たとえば、No.60 には、縦長のフォーマットに、塀で隔てられた 2 つの空間がおさめられている。塀の手前には空き地があり、低木や葉をつけていない枝、草がつつましく生え、地面が画面の 3 分の 2 を占める。塀の奥にはいくつか種類の異なる木々の姿が軽妙なタッチで描かれている。いわゆる「絵になる」構図ではない、空間の一角をそのまま切り取ったようなこうした構図には、戸外で写生を行った現場ならではの臨場感がある。何でもない素朴な風景であるが、この場面選択にこそ、森芳雄らしさが表れているのではないだろうか*[26]。もう少し森芳雄の風景描写をみてみよう。ここでは木々の描写に注目したい。No.4 の遠景には塾監局が細い描線で微かに表され、画面の半分以上を枝のうねる群木が覆う。枝は力強い描線で濃淡がつけられ、葉はいくつかの単線によって、その量感が軽やかに表される。No.57 の素描の焦点は、右手にひっそりと登場する建物よりも、真っ直ぐに伸びる木や、石ころが転がる野趣溢れる一角にある。幹のごつごつとした凹凸と、そこからすらりと伸びる枝の対比を観察し、簡潔に表している。No.35-2 では、地面からたっぷりと水を吸い上げ、逞しく育った量感ある太い幹が中央にそびえ、画面全体を葉叢が覆う。このように木々の描きこみの程度は様々だが、ひとつひとつ、そこに在る個体の木々を観察し、自然から直接素描する筆跡が見て取れる。ここで、木について次のように述べる森芳雄の言葉に注目したい。

「私はかねてから椎の木とかその他、常盤木の徹底的に青黒い葉のしげみと、枯木のかわいた肌、そういうもののコントラストを美しいと思っていました。いわゆる風景らしい構図から制作しないで、これからはそういう物の質のコントラストの面白みをきっかけにして風景というテーマを扱っていきたいと思う*[27]。」

この言葉からは、対象へ純粋に向かう、森の姿勢が垣間見える。本素描群においても、自然を写した素描からは、瑞々しい、気負いのない写生態度が見て取れる。

森は依頼されて三田キャンパスを描きに訪れたが、建物だけでなく、そこに在る自然や平凡な風景にも目を留めた。建物と自然が集まるキャンパスは、画家にとって豊かなモティーフを備える魅力的な写生地であったかもしれない。そしてこれらの素描群は、普通部時代、三田の地で過ごした体験をもつ森芳雄だからこそ捉え得た、キャンパスという空間の記録でもある。

おわりに

本稿では、森芳雄による素描 60 点 64 面を通覧した。描かれている校舎の多くは現存しておらず、本素描は 1950 年代初頭の移り変わる三田キャンパスを描きとめた貴重な記録であると同時に、画家自身のキャンパスという空間体験に根差した写生行為の記録でもある。森芳雄が戦後の三田山上を歩き、眺め、写生を行った時、森のなかではかつてその場所で過ごした記憶が呼び起こされていたのではないだろうか。これらの素描は、森のその眼差しを、生き生きと伝えてくれる。

［謝辞］

本稿執筆にあたり、門田正子氏からご教示を賜りました。写真の調査では、慶應義塾広報室および慶應義塾福澤研究センターのご協力を賜りました。ここに記して深く御礼申し上げます。

註

＊1　普通部は 1898（明治 31）年 5 月に五年制の中学校として確立され、1947 年から三年制に変更された。旧制の中学の時代は、はじめ三田山上にあり、1917（大正 6）年に三田綱町に移った。1945（昭和 20）年 5 月に戦災をうけて三田山上に戻り、のちの第一研究室を使用したあと、渋谷区豊沢町の幼稚舎校内に移り、そこで 8 年間、幼稚舎との同居生活を送る。そして 1951 年 10 月より、日吉の新校舎へ徐々に移転した。（慶応義塾編『慶應義塾百年史』下巻、1968 年、582 頁。）

森芳雄は後に普通部について回想し、次のように述べている。「学校のいいところは、そこで友だちが出来るということだと思う。その意味で、私は慶應普通部に感謝している。（中略）私の展覧会のときなど、慶友会の連中が次々に来てくれる。病気のとき、同級生の医学博士の世話になった。友人はありがたいものである」（「私の素描」『森芳雄 素描集』朝日新聞社、1980 年、頁数記載なし。）

＊2　本学では以下の森芳雄作品を所蔵している。（2021 年度末調査時点）

《窓》1949 年、油彩・カンヴァス、86.0 × 105.6cm、慶應義塾幼稚舎

《三田山上風景》1951 年、油彩・カンヴァス、24.2 × 33.8cm、慶應義塾大学

《坂道》1953 年、油彩・カンヴァス、33.2 × 24.3cm、慶應

義塾大学アート・センター
《母と子》1989年、油彩・カンヴァス、100.2 × 80.5cm、慶應義塾普通部
《チュルリー公園》油彩・カンヴァス、59.5 × 49.0cm、慶應義塾中等部

＊3　門田正子氏によると、森芳雄自身がこの組み合わせでマット装を行った可能性が高いとのことである。

＊4　状態の良くない作品に関しては、2022年度に修復を予定している。

＊5　『森芳雄素描集』彌生画廊、1981年。

＊6　筆者は当センターの「慶應義塾の建築プロジェクト」に携わっており、本調査は同プロジェクトの基礎調査が基盤となっている。プロジェクト概要は以下を参照。（http://www.art-c.keio.ac.jp/archives/list-of-archives/architecture-of-keio/）

＊7　この門柱はNo.22にも描かれている。No.22では裏門を右手に綱坂を描いている。

＊8　『慶應義塾百年史』下巻、281頁。

＊9　本作品は、1996年に文学部名誉教授八代修次氏より慶應義塾大学アート・センターに寄贈された。

＊10　演説館は1875年竣工。外壁は板瓦なまこ壁で、ガラスをはめた洋風の上下窓があり、正面中央に切妻造屋根の玄関を設けるなど、幕末・明治初期に流行した和洋折衷様式建築の希少な現存事例である。竣工当初は図書館と塾監局の間にあったが、1924年に現在の構内南西にあたる稲荷山に移築された。（慶応義塾編『慶應義塾百年史』中巻（後）、1964年、181-182頁）

＊11　第二研究室は、谷口吉郎設計、1951年1月着工、8月竣工。慶應義塾復興建築中最初の鉄筋コンクリート造。一階には谷口吉郎とイサム・ノグチの協働による談話室（通称「ノグチ・ルーム」）がつくられた。この建築空間は1951年度の建築学会賞を受賞。第二研究室は2003年に解体され、2005年に南館3階の屋上ルーフテラスへ一部が形を変えて移築された。

＊12　大講堂は、曾禰中條建築事務所設計、1915年竣工。ゴシック様式の外観を特徴とし、図書館とともに三田山上の双璧をなしたが、関東大震災で外壁が大きく破損。また1945年の空襲で焼失した後、焼け残った外壁がそのままになっていた。1957年5月に取り壊された。

＊13　曾禰中條建築事務所設計、1926年竣工。現存。

＊14　曾禰中條建築事務所設計、1912年竣工。

＊15　『慶應義塾百年史』下巻、247頁。

＊16　第一校舎は曾禰中條建築事務所設計、1937年竣工。現存。

＊17　学生ホールは谷口吉郎設計、1949年竣工。学生食堂の東西両壁面には猪熊弦一郎の壁画《デモクラシー》が飾られた。第三校舎（四号館）とともに1949年度第一回建築学会賞を受賞。1961年6月に北側低地へ移築されるまで、裏門の坂道をのぼった右手にあった。

＊18　第一研究室は中條精一郎設計、1920年竣工。1967年に取り壊された。

＊19　第二校舎（五号館）は谷口吉郎設計、1949年1月竣工。1955年に図書館新築に伴い取り壊された。

＊20　第三研究室は谷口吉郎設計、1952年9月竣工、1984年に取り壊された。

＊21　福澤公園は、1947年に三田山上にあった福澤旧宅の焼け跡を整備してつくられた。（慶應義塾史事典編集委員会編『慶應義塾史事典』2008年、540頁。）

＊22　「森芳雄　自らを語る」『森芳雄素描集』彌生画廊、頁数記載なし。

＊23　瀧悌三「その背後にあるもの――森芳雄の素描に寄せて――（1945-1959年）」『森芳雄素描集』彌生画廊、頁数記載なし。

＊24　1950年、油彩・カンヴァス、130.3 × 162.1cm、紀伊國屋書店。

＊25　以下の資料には、七洋社社長樺山資雄より依頼されたと記されている。（瀧悌三「その背後にあるもの」、頁数記載なし）

＊26　今泉篤男は森芳雄について、「ピトレスクでない景観を一枚の絵にするのは、この画家の本能的なリリスムである」と述べている。（今泉篤男「森芳雄の人と作品」『森芳雄作品集』日本経済新聞社、1975年、12頁。）

＊27　「風景を契機として　自然・自己・画面」『美術手帖』第84号（1954年8号）美術出版社、82頁。

本学の建築の基本情報については、主に以下を参照。

・慶應義塾編『慶應義塾百年史』中巻（前）、1960年。
・慶應義塾編『慶應義塾百年史』中巻（後）、1964年。
・慶應義塾編『慶應義塾百年史』下巻、1968年。
・慶應義塾史事典編集委員会編『慶應義塾史事典』2008年。

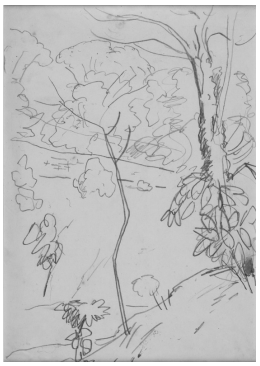
森芳雄　素描リスト

※本リスト記載の裏門は現・西門、図書館は現・図書館旧館、正門は現・東門である。

作品no	内容注記	制作年	技法・材質	寸法（cm）＊No.1-24 はマット窓寸	形状	マットサイズ	備考
1	第三校舎（四号館）付近カ	1950 年代頃	鉛筆・紙	24.0 × 17.0	マット装	39.5 × 72.5	
2	裏門付近カ	1950 年代頃	鉛筆・紙	24.0 × 17.0	マット装	39.5 × 72.5	
3	裏門	1950-52 年	鉛筆・紙	24.0 × 17.0	マット装	39.5 × 72.5	
4	塾監局カ	1950 年代頃	鉛筆・紙	19.0 × 25.7	マット装	77.3 × 41.0	
5	演説館	1950 年代頃	鉛筆・紙	19.0 × 25.7	マット装	77.3 × 41.0	
6	演説館、第二研究室、大講堂カ	1951-57 年	鉛筆・紙	19.0 × 25.7	マット装	77.3 × 41.0	
7	図書館	1950 年代頃	鉛筆・紙	18.8 × 26.7	マット装	78.0 × 72.0	
8	図書館あるいは正門カ	1950 年代頃	鉛筆・紙	18.8 × 26.7	マット装	78.0 × 72.0	
9	図書館	1950 年代頃	鉛筆・紙	18.8 × 26.7	マット装	78.0 × 72.0	
10	図書館	1950 年代頃	鉛筆・紙	18.8 × 26.7	マット装	78.0 × 72.0	
11	図書館	1950 年代頃	鉛筆・紙	18.8 × 26.7	マット装	78.0 × 72.0	
12	図書館	1950 年代頃	鉛筆・紙	18.8 × 26.7	マット装	78.0 × 72.0	
13	図書館	1950 年代頃	鉛筆・紙	17.0 × 20.5	マット装	52.5 × 59.7	
14	図書館	1950 年代頃	鉛筆・紙	17.0 × 20.5	マット装	52.5 × 59.7	
15	図書館	1950 年代頃	鉛筆・紙	17.0 × 20.5	マット装	52.5 × 59.7	
16	図書館（手前は五号館カ）	1950 年代頃	鉛筆・紙	17.0 × 20.5	マット装	52.5 × 59.7	
17	図書館	1950 年代頃	鉛筆・紙	18.7 × 26.6	マット装	83.5 × 69.7	
18	図書館	1950 年代頃	鉛筆・紙	18.7 × 26.6	マット装	83.5 × 69.7	
19	図書館	1950 年代頃	鉛筆・紙	19.0 × 26.5	マット装	83.5 × 69.7	
20	塾監局越しの図書館	1950 年代頃	鉛筆・紙	26.5 × 18.5	マット装	83.5 × 69.7	
21	図書館（手前は五号館カ）	1950 年代頃	鉛筆・紙	17.0 × 20.8	マット装	83.5 × 69.7	
22	綱坂	1950 年代頃	鉛筆・紙	17.0 × 24.0	マット装	83.5 × 69.7	
23	図書館	1950 年代頃	鉛筆・紙	24.0 × 33.3	マット装	66.5 × 48.5	
24	演説館（奥に第二研究室カ）	1952 年	鉛筆・紙	24.0 × 33.3	マット装	66.5 × 48.5	右下にサイン・年記あり：y. mori 1952
25	裏門坂道、第三校舎（四号館）	1950-52 年	鉛筆・紙	25.0 × 17.7	ペラ		
26	裏門坂道、第三校舎（四号館）		鉛筆・紙	18.0 × 25.3	ペラ		
27	裏門坂道、第三校舎（四号館）		鉛筆・紙	21.5 × 18.0	ペラ		
28	裏門付近		鉛筆・紙	17.7 × 25.0	ペラ		
29	演説館		鉛筆・紙	21.5 × 29.8	ペラ		
30	演説館		鉛筆・紙	21.5 × 29.8	ペラ		
31-1	演説館		鉛筆・紙	36.7 × 26.2	ペラ		両面に描画あり
31-2	演説館		鉛筆・紙	36.7 × 26.2	ペラ		両面に描画あり
32	演説館		鉛筆・紙	25.5 × 18.0	ペラ		
33	演説館		鉛筆・紙	21.5 × 18.0	ペラ		
34	演説館		鉛筆・紙	21.5 × 18.0	ペラ		
35-1	塾監局カ		鉛筆・紙	36.7 × 26.2	ペラ		両面に描画あり
35-2	演説館付近		鉛筆・紙	36.7 × 26.2	ペラ		両面に描画あり
36	演説館		鉛筆・紙	21.5 × 18.0	ペラ		
37-1	演説館		鉛筆・紙	36.7 × 26.2	ペラ		両面に描画あり
37-2	木立		鉛筆・紙	36.7 × 26.2	ペラ		両面に描画あり
38	図書館		鉛筆・紙	20.5 × 27.5	ペラ		
39	図書館		鉛筆・紙	19.4 × 27.0	ペラ		
40	図書館		鉛筆・紙	17.7 × 25.0	ペラ		
41	図書館		鉛筆・紙	21.5 × 18.0	ペラ		
42	図書館と正門へ向かう坂カ		鉛筆・紙	20.5 × 27.5	ペラ		

43	正門へ向かう坂付近カ		鉛筆・紙	20.5 × 27.5	ペラ		
44	図書館・五号館前広場、福澤公園カ		鉛筆・紙	25.0 × 17.7	ペラ		
45	図書館・五号館前広場ベンチカ		鉛筆・紙	19.4 × 27.0	ペラ		
46	図書館・五号館前広場福澤公園カ		鉛筆・紙	18.1 × 25.4	ペラ		
47	ベンチ		鉛筆・紙	19.4 × 27.0	ペラ		
48-1	広場		鉛筆・紙	36.7 × 26.2	ペラ		両面に描画あり
48-2	不明		鉛筆・紙	36.7 × 26.2	ペラ		両面に描画あり
49	左：塾監局　右：五号館カ		鉛筆・紙	20.5 × 27.5	ペラ		
50	学生ホール、大イチョウ、第一校舎カ		鉛筆・紙	21.5 × 29.8	ペラ		
51	第二研究室	1951 年以降	鉛筆・紙	25.5 × 18.0	ペラ		
52	第一研究室、図書館、第一校舎		鉛筆・紙	17.7 × 25.0	ペラ		
53	坂道		鉛筆・紙	17.7 × 25.0	ペラ		
54	塾監局		鉛筆・紙	18.0 × 21.5	ペラ		
55	大講堂、大イチョウ、第一校舎カ		鉛筆・紙	21.5 × 18.0	ペラ		
56	演説館、第二研究室、大講堂カ	1952 年以前	鉛筆・紙	21.5 × 29.8	ペラ		
57	第三校舎（四号館）付近カ		鉛筆・紙	25.0 × 17.7	ペラ		
58	木立		鉛筆・紙	21.6 × 18.0	ペラ		
59	道		鉛筆・紙	25.5 × 18.0	ペラ		
60	空き地		鉛筆・紙	25.0 × 17.7	ペラ		

森芳雄 素描 画像一覧



No.1

No.2

No.3

No.4

No.5

No.6

No.7

No.8

No.9

No.10

No.11

No.12

No.13

No.14

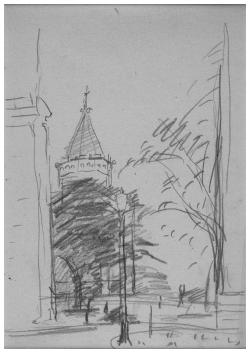
No.15

No.16

No.17

No.18

No.19



No.20

No.21

No.22

No.23

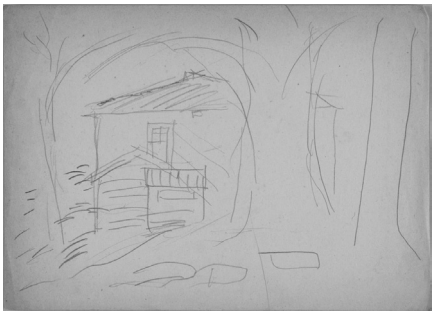
No.24

No.25

No.26

No.27

No.28

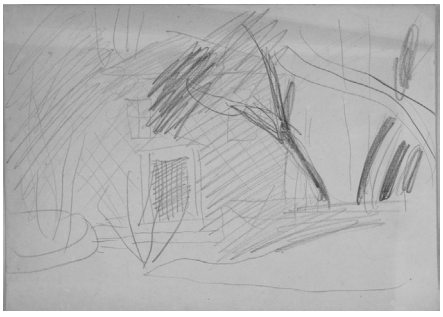


No.29

No.30

No.31-1

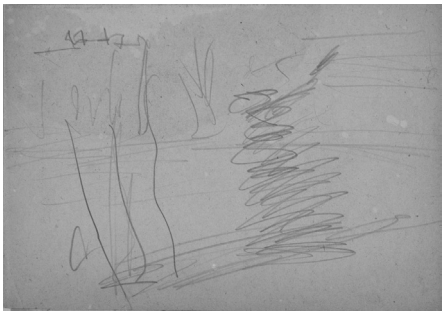
No.31-2



No.32

No.33

No.34



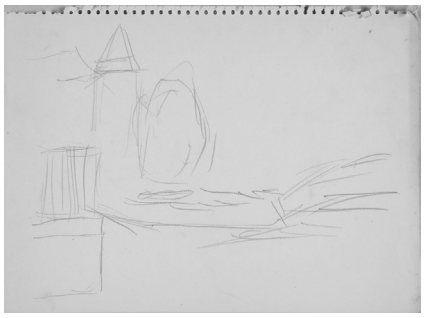
No.35-1

No.35-2

No.36

No.37-1

No.37-2



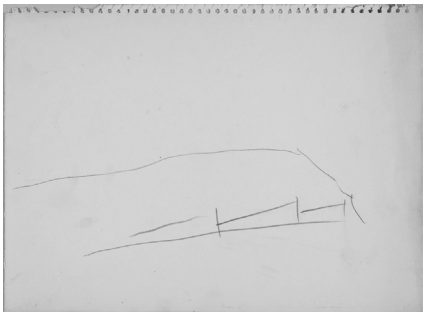
No.38

No.39

No.40

No.41

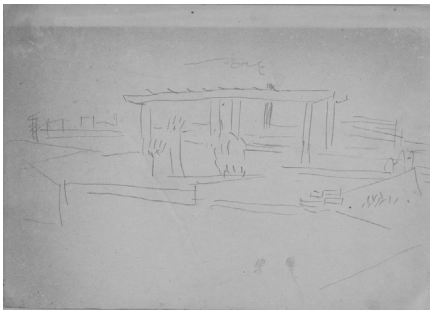
No.42



No.43

No.44

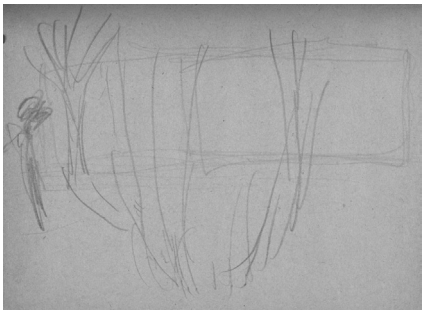
No.45



No.46

No.47

No.48-1



No.48-2

No.49

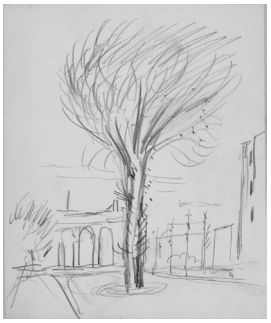
No.50

No.51

No.52

No.53

No.54



No.55

No.56

No.57

No.58

No.59

No.60